

DATA FILE



六方晶系

名前	AVENTURINE (アベンチュリン) / 砂金石
化学組成	SiO ₂ (+包有物)
色	緑色、褐色など
光沢	ガラス光沢、脂肪光沢
蛍光	なし
条痕	白色
劈開	なし
断面	貝殻状
硬度	7
比重	2.6

アベンチュリン

AVENTURINE

塊状であらわれることが多いが、六角柱状の結晶形が確認できることもある。

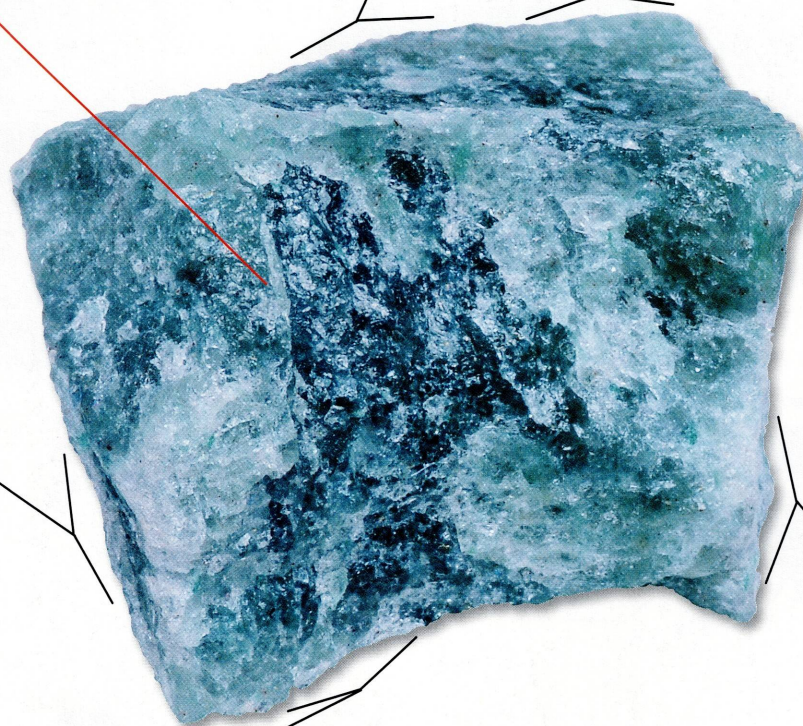
ガラスのような光沢や脂肪のような光沢を持つ。

塊状で産出したアベンチュリン。インド産。

劈開はないが、ハンマーでたたくと貝殻状の断面を示す。

雲母などの微小な包有物を含み、磨くときらきらと輝く石英を「アベンチュリン」と呼ぶ。

素焼きの陶板にこすりつけると白色の条痕が残る。

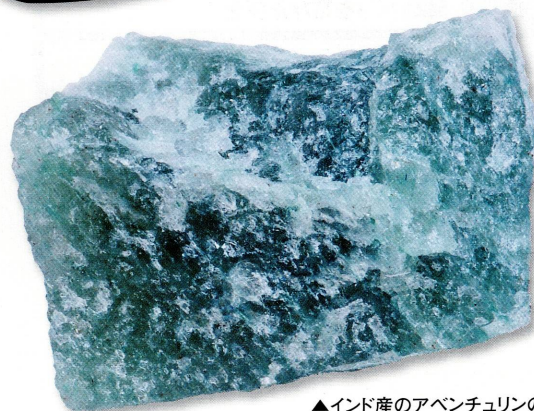


閃光を示す石英

「アベンチュリン」とは、雲母などの微小な包有物を含み、微粒子の内部反射によりきらきらとした閃光を放つ石英の宝石名として用いられる。石英は基本的に無色の鉱物だが、含まれる包有物の種類によってさまざまな色であられ、一般的には含クロム白雲母などを含む緑色のものが多い。そのほか、針鉄鉱や赤鉄鉱などを含む褐色や赤色のものが見られることもある。

アベンチュリンのなかで、深い緑色でむらのない発色をしたものはエメラルドに間違えられることがある。また、ひすい輝石と外見がよく似ていることから、特にインド産のものは「インドひすい」と呼ばれ、ひすい輝石の模造品に用いられている。なお、和名の「砂金石」は見た目から名づけられたもので、実際に砂金を含んでいるわけではない。

▼ブラジル産のアベンチュリン。



▲インド産のアベンチュリンの原石。

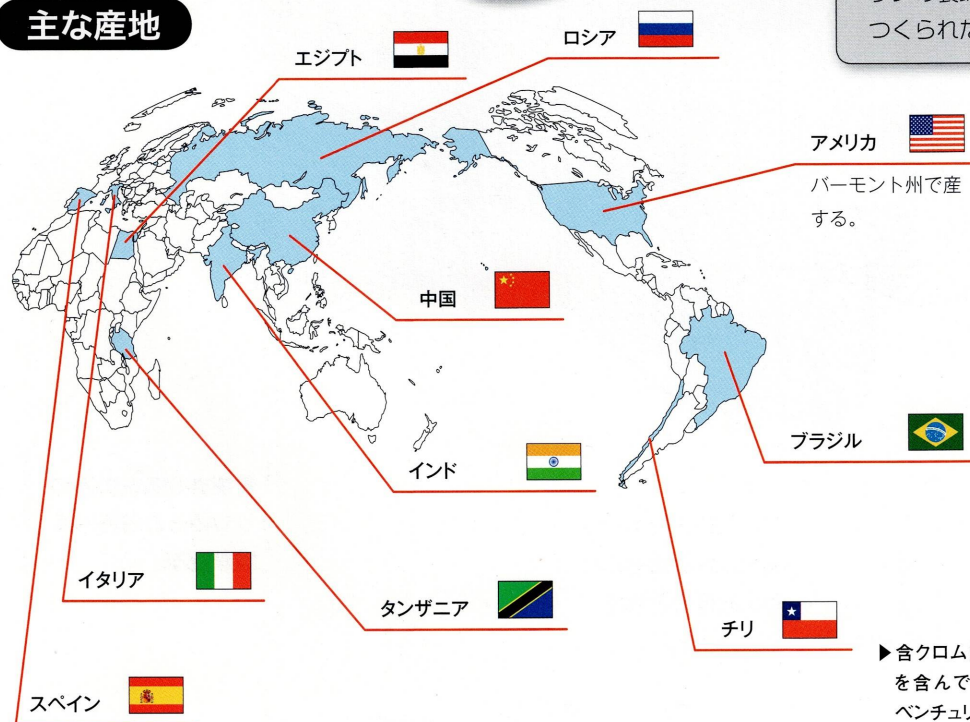
◀研磨されたアベンチュリン。



装飾品に利用

アベンチュリンは古くから装飾品として利用され、紀元前3世紀につくられた工芸品が中国や地中海の周辺で見つかった。現在では主に大きな鉢や花瓶、装飾用の石板や像に加工されるほか、カボションカットを施されてブローチなどのアクセサリーとして利用されている。なお、アベンチュリンの装飾品のなかには、ガラスに銅粉を入れてつくられた模造品も存在する。

主な産地



▶含クロム白雲母を含んでいるアベンチュリン。